

平成29年度 第1回 静岡市総合教育会議

日時：平成29年7月21日（金）

午後1時～午後2時50分

場所：静岡市役所静岡庁舎

8階 市長公室

（午後1時開会）

○司会（企画課 下山主査）

定刻よりほんの少し前ではございますが、皆様お揃いでございますので、開会させていただきます。本日はご多忙の中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

只今より、平成29年度第1回静岡市総合教育会議を開会いたします。

開会に当たりまして、田辺市長からご挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

○田辺市長

それでは一言、御礼方々、ご挨拶を申し上げます。本当にお暑い中ご参集をたまわりまして、どうもありがとうございます。今年度の第1回目の総合教育会議ということで大変注目も集めておりますし、市議会議員の有志の方々も今日は傍聴に駆けつけて下さったと。ああ、副議長もいらっしゃいますかね。ありがとうございます。

1回目の総合教育会議が、新しいメンバーの下、始まります。教育委員会のほうは池谷新教育長の下、望月教育局長。それに学校現場に精通をしている局長級の職員として望月教育統括監。そして、その下で文部科学省から出向して2年目の高井絢教育局次長を起用して、チーム池谷の体制をスタートさせ、3か月余が経ったところであります。

今年度もがっぷり四つにこの総合教育会議の法制度の趣旨を生かして、教育委員の皆さんと議論を交わし、ここでの議論が一つでも二つでも、実際の教育行政に反映をされるよう、努力をしていきたいというふうに思います。

どうぞ、今日も活発な御意見を賜りますよう、よろしくお願い申し上げ、私の挨拶いたします。最初ですので、気合を入れて、立って挨拶をさせていただきました。

よろしく願いいたします。

○司会（企画課 下山主査）

引き続きまして、静岡市教育委員会の池谷教育長よりご挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

○池谷教育長

こんにちは。教育長の池谷でございます。

教育委員会を代表して一言ご挨拶させていただきます。本日開催されます総合教育会議

につきましては、平成26年地方教育行政法の改正によって始まったもので、今年度、3年目となります。

私自身は、この新教育委員会制度の中で選ばれた教育長ということで、この総合教育会議に臨むわけですが、この新教育委員会制度の中で求められているものとして、市長部局と教育委員会との更なる連携の強化というのがあります。そういった意味で、私も本当に重要な会議として認識しております。

今現在、学校におきましては子どもたちの減少、そして子どもたちが育っていく中でグローバル化、いろいろな問題があります。そういった中で子どもたちが、しっかりと将来、夢と希望を持っていけるような形を整えていきたいと考えております。

子どもたちにそういった確かな力を育成するためには、学校の教育の力だけでは足りず、当然ながら、地域の力を借りなければなりません。

地域と共にある学校を目指しておりますが、それに加えて、今回のように市長部局との「連携」、これを強くやっていくことの重要性を、教育委員会としても認識しておりますし、このことに関しては非常に歓迎すべきものと考えているところです。

これまでの総合教育会議では、各年度3つのテーマでやってきました。

その中で成果といたしまして、小中一貫教育、教員の子どもたちと向き合う時間を作るための校務支援システム、給食の校外調理方式の解消、最近の貧困問題からのスクールソーシャルワーカーの拡充などといった成果も見られております。

これらの施策を着実に進めながら、次代を担う「たくましく、しなやかな子どもたち」という形で、夢と希望を持って未来を切り開くことができる環境を整えていきたいと考えております。

本年度につきましても3つのテーマを予定しているとのことですが、市長と教育委員会が協力して取り組み、子どもたちのためにより大きな成果を上げていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○司会（企画課 下山主査）

ありがとうございました。本日はご発言される際は、大変お手数ではございますが、前にございますマイクのボタンを押してからご発言いただきますよう、また発言が終了しましたらボタンを再度押していただきますよう、よろしく願いをいたします。

それでは、これより会議に移らせていただきます。ここからの進行は会議の座長でございます、田辺市長にお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

○田辺市長

はい、わかりました。

それでは次第に従いまして進めてまいります。

最初に議事の(1)今年度の総合教育会議の進め方についてですが、今年度のテーマや3回の会議での進め方。今、若干、池谷教育長からお話がありました通りでありますけれども、そのことについての確認のため、まずは事務局からの説明をお願いします。

○松永企画局長

事務局の企画局の松永と申します。よろしく申し上げます。座ったままで説明をさせていただきます。

今年度の進め方につきましてご説明いたします。資料につきましては、A4の上から4枚目ほどにあると思いますけども、右肩に資料1と書いてございます。平成29年度静岡市総合教育会議についてという資料をご覧いただきたいと思います。

まず1項目目の協議事項でございますけれども、昨年度の議論を踏襲しながら、今年度は記載の通り、3項目につきましてご協議いただきたいと考えております。

1点目のグローバル人材育成のための魅力ある教育施策では、先進的な英語教育と“しずおか学”を重点的に協議いただきたいと考えております。

2点目の日本一おいしい学校給食の提供では、健康長寿世界一の町の実現を目指す中で、健康に深く関係いたします食を通じた施策としまして、学校給食で実施すべき取組みについてご協議いただきたいと考えております。

3点目の子どもの貧困対策では、現在実施中の子どもの生活実態調査の結果を踏まえて、重層的に切れ目のない支援を行えるよう、関係局でございます保健福祉長寿局、こども未来局、教育局が連携した貧困対策につきましてご協議をいただきたいと考えております。

次に2番の今年度の進め方についてですが、年内中に本日の会議を含めまして、3回の会議を開催予定しております。本日の第1回の会議では、特に“グローバル人材育成のための魅力ある教育施策”と“日本一おいしい学校給食の提供”を中心にご協議いただきたいと思っております。

また10月開催予定の第2回会議では、9月末に速報値が出る予定でございます子どもの生活実態調査の結果を受けまして、特に“子どもの貧困対策”を中心にご協議いただく予定としております。

そして12月に開催予定の第3回の会議では、3項目につきましてそれぞれとりまとめを行い、来年度に向けた取組みも整理していきたいと考えております。説明は以上でございます。

○田辺市長

はい、松永局長、ありがとうございます。

協議事項は3点。“グローバル人材育成のための魅力ある教育施策”、“日本一おいしい学校給食の提供”、“そして子どもの貧困対策”と設定させていただく。

そして、今年度の進め方も、3回の会議。これについては、教育委員の皆様、大変お忙しいところ恐縮ですが、この総合教育会議はペースメーカーの役割を果たしています。教育施策の充実の加速化に向けてのペースメーカー、という重要な役割を担っているということで、当初事務局の案は2回だったのです、今年度は。けども、市長、副市長、今日は小長谷副市長にもオブザーブしてくれておりますけれども、私たち二役の思いの中で、もう1回増やしてくれということで、3回今年度やらせていただくということを説明させ

ていただきましたが、本年度は3項目の協議事項と、3回の総合教育会議の開催で協議をしてということで、ご異議はございませんでしょうか。

小さな声ではありましたが賛成という声が聞こえてまいりましたので、ご意見がないということで、よろしく願い申し上げます。

では、さっそく議事の(2)協議事項について入ります。先ほど事務局からの説明の通り、本日の会議はとりわけ“グローバル人材育成のための魅力ある教育施策”と、“日本一おいしい学校給食の提供”。この2つの項目がメインとなっております。まず教育局長からグローバル人材育成のための魅力ある教育施策についての説明をお願いします。

○望月教育局長

教育局長です。よろしくお願いします。

A3横書きの資料2-1をご覧ください。

一つ目のテーマはグローバル人材育成のための魅力ある教育施策です。

まず始めに、現状ですが、昨年度、平成28年度の総合教育会議では、静岡市ならではの人材育成についてご議論をいただきました。その中で、今後取り組むべき方向性といたしまして、一番上にありますように、社会性を備え、静岡市民として、地域社会や世界で活躍する子どもたち、いわゆるグローバル人材を育成していくことが、これからは必要だろうというご議論をいただきました。その具体的な施策は二つございます。

一つ目は、左にありますように、“英語を活用したコミュニケーション向上”、それからもう一つは右側にあります“しずおか学”の展開です。この二つの施策に力を入れていくべきだというご議論をいただきました。

それぞれ、“英語を活用したコミュニケーション向上”につきましては、目的をそこにありますように異なる文化の人々と自信を持ってコミュニケーションをとることができ、地元への愛情を持ちながら国際的に活躍できる子どもたちを育てること、“しずおか学”につきましては、地域や静岡市に愛着と誇りを持ち、社会や世界に広く目を向ける子どもを育てること、このような目的で進めていこうというところまでご議論をいただきました。

この二つのテーマにつきましては、それぞれプロジェクトチームを作っておりまして、これまで検討を重ねてまいりましたので、まずは、そのプロジェクトチームからこれまでの検討内容をご報告させていただきたいと思えます。

市長、よろしくお願いします。

○田辺市長

はい。望月教育局長ありがとうございます。

ここで委員の皆さんにぜひ知っていただきたいことは、今からこの二つの取り組みについて説明をいたしますが、現場の職員がプレゼンテーションを行うということでもあります。まず静岡英語コミュニケーション向上プロジェクトについては、静岡市ならではの英語教育カリキュラムを作成し、実施をすること。これを目的に、これから取り組むために結成をしたプロジェクトチームであります。そのプロジェクトチームのメンバーは、もちろん

事務局の学校教育課や教育センターの教員もおりますが、ALTの皆さん、そして何よりも現場でこれからこの英語教育を取り組もうとする小中学校の、これから静岡市の英語の教育界を背負っていくという意欲のある教員の皆さんにプロジェクトチームのメンバーに入ってもらっています。これまで英語教育の、日本の中では先進地といわれている石川県の金沢市、埼玉県のさいたま市に、今日の前に、事前に視察に行ってもらっています。また4月から今年度に入って、月に1回はこのプロジェクトチーム。学校現場が終わってから集まって、そして会議を開催して、スタートを切っているというふうに報告を受けております。

一方、“しずおか学”については、学校教育課の指導主事の皆さんを中心に、これも小中学校の現場の教員の皆さんが、静岡市ならではの資源を活用した特色のある教育活動を実施する検討を行っているという報告を受けております。いずれのチームの検討にも、実際に小中学校の教壇に立つ教員自身が関わって、まさに私どもが掲げる現地現場主義に基づいた取り組みが進められているということなので、直接このプロジェクトチームのメンバーから今日は委員の皆さんにプレゼンをすることにいたしました。それではよろしく願いをいたします。

まず、英語のプロジェクトチームです。

○学校教育課 黒瀬指導主事

Hello, Everyone.

I'm Sumitaka Kurose, a supervisor of Shizuoka City Board of Education.

And we're members of the English Project Team.

First of all, please let us introduce ourselves.

○伝馬町小学校 石野教諭

Good afternoon.

I am Yukiko Ishino of Tenmachi Elementary School.

I like students to enjoy English communications, so I'm working hard every day. I'm trying my best for English Education. Thank you.

○安倍口小学校 村田教諭

Good afternoon, everyone.

My Name is Jun Murata. I work at Abeguchi Elementary School.

Last year, I went to Shelbyville, a sister city, and I learned long there. So I want to return this experience for Shizuoka. Thank you for listening.

○教育センター 服部指導主事

Good afternoon, everyone.

I'm Noriko Hattori. I work at Shizuoka City Education Center.

This summer, Shizuoka City has an English Camp for the first time. It's going to be very excited camp. Students are going to speak English, all English for three days.

So it's very difficult but very exciting. I like to make students happy and have "glocal" mind. So I'll do my best. Thank you.

○学校教育課 クエンティン非常勤嘱託

Good afternoon, everyone.

My name is Zaid Quentin. I work with Mr. Kurose and people in School Education Division. I train ALTs in Shizuoka City, and translate documents as necessary. Thank you.

○松村委員

Where are you from?

○学校教育課 クエンティン非常勤嘱託

I'm from the United States, Washington State.

○松村委員

ネイティブ・スピーカーなのですね。

○学校教育課 工島主任主事

Good afternoon, everyone.

My name is Ayaka Kushima. I work at School Education Division. I'm in charge of recruiting ALTs. I'll do my best for Shizuoka City Students.

○学校教育課 黒瀬指導主事

So like this, we're building a new system to make English Education more effective and creative. I'm sure it will be helpful for all students and all teachers as well in the near future. That's all. Thank you.

○学校教育課 黒瀬指導主事

ここから日本語を使うことをお許してください。

英語を活用したコミュニケーションプロジェクトですが、今、紹介させていただいたとおり、10名で構成されております。中学校の教職員3名とそれから、CAといって、クエンティン先生が、自己紹介しましたけれども、もう一人同じ立場の者がおります。計10名です。このチームのメンバーは、これからの検討事項に応じて拡充していくことも考えております。

それからプロジェクトチームとして、先ほど市長からもお話がありましたとおり、金沢市、それから、さいたま市に視察に行かせていただき、それぞれ、行政による施策について主に学んでまいりました。また、民間の取り組みについても参考にしようということで、情報を集めております。

金沢市では、独自教材を作成しておりして、さらに日本人インストラクターが小学校で活用されているといったところに特徴がありました。これにより、学級担任の先生の負担の軽減になっているということと、それから発音指導においても、より専門的なサポートが得られているという様子でございました。

さいたま市につきましても、同様に、独自の地域教材を作成し、活用していました。地

域のことを英語で語り合い、それから発信していくという力をつけるために、カリキュラムが組まれておりました。こちらは、小学校から学級担任とALTとがチームティーチングをすることで、子どもに本物の英語を早いうちから慣れ親しませているという点に特徴がございました。

改めまして、これが静岡市の英語教育9年間で目指している児童、生徒像です。

中学校卒業時の姿として、まず、海外の人とも自信をもってコミュニケーションできる姿、次に、静岡のこと、自分の生まれ育った街について英語で話ることができる姿、さらに自分のふるさとに愛情を持ちつつ、国際的に活躍して視野を広げることができる姿というのを目指していきたいと思います。

そのために、発達段階、小学校の低学年から中学校15歳までの段階で英語教育の目的を明確にして、それに沿った授業内容を計画していきます。最終的に、中学校卒業時に、例えば、英検3級を取得する程度以上の力を身に付けるということを目指していきたいというように考えております。

小学校1、2年生の導入ですけれど、これはもう少し先になるかと思いますが、この段階では、英語って楽しいなとひたすら思えるような活動が大切であろうと思います。

小学校3、4年生では、ALTと出会い、そして聞くこと、話すことを中心に、さらに多くの英語に触れていきます。また、この段階で静岡市ならではの教材とも出会えるというと思います。

小学校5、6年生では聞くこと、話すことに加え、読むこと、書くことにも活動を広げ、6年生の段階では、地域のことを簡単な英語を使って発表できるような力を育成してきたと考えております。

そして、中学校では、聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、この4技能の力の総合的な育成を目指します。単に書いたことを英語で発表するというだけでなく、例えば、地域のことを題材に、即興で友達やALTと英語でやりとりできるという、そういった力をつけていきたいと考えております。

今後、英語プロジェクトでは、目指す児童・生徒像を実現するためにも、静岡型小中一貫英語教育カリキュラムを策定していく予定です。その検討事項といたしまして、

1. 英語でコミュニケーションをとる場をどう設定するか。
2. 地域のことを英語で語れる力をどのようにつけていくか。
3. 静岡型カリキュラムに合った教材の開発のあり方。
4. 教員の英語力、英語指導力をどう向上させていくか。
5. 指導に必要な人材をどう確保し、活用するか。
6. 英語力向上の目標の達成度をどう把握していくのか。

という、主にこの6点が検討事項に挙がってきております。ご協議いただけますよう何卒よろしくお願いいたします。英語力の向上につきましては以上でございます。

○田辺市長

それでは続いて“しずおか学”のほうのプレゼンテーションをお願いします。こちらも自己紹介あるのかな。

○学校教育課 石井指導主事

Good afternoon, everyone. I'm Ishii...

○田辺市長

いいねえ。

○学校教育課 石井指導主事

僕は日本語で失礼します。今日は一人ですが、一生懸命プレゼンさせていただきますので、よろしくお願いします。

まず、“しずおか学”は、地域や静岡市に愛着と誇りを持ち、社会や世界に広く目を向けることができる子どもを育てることを目標としております。

ここで目指す児童・生徒像としましては、静岡市の歴史文化を学ぶ、静岡市への愛着と誇りを持つ子ども、社会に参画する子ども、こういった子どもたちを育てていきたいと思えます。例えば、将来、出会った同僚や友人に、静岡のお茶を語りながら、静岡の美味しいお茶の淹れ方をレクチャーできるような、静岡市に誇りを持つ人材に育てていきたいと思っております。

1年生から9年生まで通して、こういったところを狙いにしていくか、というのがこの表になりますが、まず小学校1・2年生においては「地域に関心を持つ」、3・4年生については「地域の一員であることを自覚する」、5・6年生においては「地域活動に参加する」、中学生については「地域活動に参画する」といった姿を目指してまいります。

まず、「関心を持つ」をキーワードとしております小学校1・2年生については、主に生活科の時間に指導してまいります。例えば、地域に出向いて、地域の宝、自慢を見つけてくる、こういった学習を進めてまいりたいと思っております。

「自覚する」をキーワードとする小学校3・4年生においては、お茶の栽培、漁港や漁の様子、地域の産業、例えば、プラモデルなどの伝統工芸といったものを地域の方との関わりを大事にしながら進めていきたいと思っております。

次に5・6年生ですけれども、キーワードは「参加する」です。例えば、徳川家康と久能山、南アルプス、エコパーク、こういった地域の文化だとか特徴に視点を当てた学習を進めていきたいと考えております。

最後に「参画する」中学生については、例えば、聖一国師とお茶、災害から身を守る等があります。これは総合的な学習の時間を中心に進めていきますが、例えば、防災教育をする中で、自ら課題意識をもって、災害・防災に関して地域の課題があるのではないかと感じたことについて、地域の方に語りかけ、12月に行われる地域防災の日に関わる活動内容について、一緒に考えていく、参画する、そういった姿を目指せばいいなと思っております。

現在、地域や静岡市のことについて、子どもたちは、皆さんのお手元にもありますが、社会科副読本や付録の地図、しずおか学－BOOK等を使って学習を進めております。

そして、今回新たにグローバル人材を育成していくということで、“しずおか学”副読本を作成してまいります。分野は、お茶、しずまえ、オクシズ、海洋、防災、歴史文化、この6分野を考えております。

チーム“しずおか学”編集委員会ですが、本年度の5月に立ち上げを行ない、平成31年度4月公表を目指して頑張っているところです。企画検討部会は6名、執筆部会は42名で執筆に当たっております。また、市内の大学3校と13の関係各課と連携をしながら、この内容を検討しているところです。

今回の一つの目玉としまして、執筆部会において、静岡市のこれからの教育を担う、若手の先生方30名を起用しております。若い力で静岡の魅力を発信できる教材を作っていきたいと考えております。以上になります。ありがとうございました。

○田辺市長

どうもありがとうございました。大変、それぞれ力強いプロジェクトチームの報告がありました。少し、それぞれのプロジェクトについての課題の整理をここでしたいと思えます。そのあと、委員の皆さんとの対話をしたいと思えますが、まず教育局長から資料の2-1を用いながら課題についての説明を受けたいと思えます。

○望月教育局長

資料の2-1にお戻り下さい。右側になります。

現状ですが、コミュニケーション向上プロジェクトにつきましては、上のグラフは英検3級相当の生徒の割合です。平成26年度は全国平均と比べて下回っている状況、28年度になりますと、ようやく全国平均に追いついたというような現状になっております。

それから下のグラフは、授業で50パーセント以上英語を使う教員の割合で、これも全国平均と比べますと、まだまだ低い状況にございます。

それから、下段の“しずおか学”の展開についてですが、昨年の学力状況調査の質問紙の中の回答で、地域の行事に参加しているか、ボランティア活動に参加したことがあるか、地域の出来事に関心があるかについて、中学生は全国平均を上回った状況ですが、小学生については全国平均と比べて、まだまだ低い状況にあるということが分かります。

これらを踏まえまして、左側の下段、課題として捉えておりますのは、英語のコミュニケーション向上プロジェクトにつきましては、まだまだ日常的に英語の使い方が足りない、英語で語る力が不足している、付けたい力の定着の状況を客観的に把握できる方法がない、まだまだ教員の英語力が十分でないといったことがございます。

“しずおか学”の展開につきましては、これから“しずおか学”を進めていく中で、子どもたちの地域に対する関心をさらに高めていく必要があるという課題を認識しております。これらを踏まえて、本日皆さんから今後の進め方について、ご意見を頂戴したいと思います。よろしくおねがいします。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございました。課題の設定をしましたがけれども、あの、グローバル人材の育成、このグローバルという言葉は、高木前教育長が大変こだわっていて、残してくれた、いわばレガシーであります。ご承知のとおり、グローバルとローカルを合わせた造語でありますけれども、これからの静岡市で子どもたちは、視野広く、地球的な活躍をする、コミュニケーションを道具として英語も一緒に学んでもらいたい。

一方で静岡に対する誇りとか愛着、つまり静岡を語れるのは国際人の第一歩だよ、というような理念の下で、このグローバル人材の育成というものを掲げたわけでありまして。このレガシーを私たちが、今年度引き継ぎなおしていかなければなりません。そういった観点から、これから15分ぐらい、それぞれ委員の皆さんから、ご感想、あるいは要望、ご意見、何でも結構ですのでご発言をお願いしたいというふうに思います。今後の参考にさせていただきたいと思いますが、英語プロジェクトと“しずおか学”プロジェクトと分けて議論をしていきたいと思っておりますので、まず、英語を活用したコミュニケーション向上の今後の取り組みにつきましてご発言をお願いしたいと思います。いかがでしょう。

○杉山委員

一番英語を話せない私が、先に発言させていただきます。

○田辺市長

意外でした。

○杉山委員

私には、2人の娘がおります。上の子が一緒に会社をやっていますが、下の子が学生時代に、短期間、海外に行っていて、帰ってきた後、海外との取引をする会社にいました。

子どもを出産して、今、子育てをしているのですが、当時、ドイツ語を使っていたのですが、やはり、なかなか使う場がないのです。それで忘れちゃうよといつも言うのです。

どこかで、活躍の場がないかなと。たぶん、そういう人たちは静岡市内に、ドイツ語に限らず英語でも、沢山いらっしゃると思うのです。

授業は、先生がやらなければいけないのは勿論の話ですが、サポート役というか、そういう方をいわゆる発掘することが、すごく大事ではないかなと思っております。

ぜひ、そういう面でも、この資料2-1の、先生のちょっと足りない分に、やはりそういう方を活用しながら、授業を進めていくのも一つではないかなと思っております。

○田辺市長

なるほど。ありがとうございました。これにつきましては、プロジェクトチームのほう、いかがでしょうか。私自身も実は、イギリスに留学して帰ってきてもう最初はかなりペラペラで帰ってきたのですが、静岡にいと使う場面がないのです。25年のうちにすっかりさびついてしまった。もったいないことをしたなあと。つまり、そこに行けば絶えず、その英語で話せるという環境を静岡市で作っていくということも大事なんでしょう。

これは、社会に入ってからということも含めてですね。

○杉山委員

はい、学校の中も含めてです。

○田辺市長

なるほど。プロジェクトチームの皆さん、いかがでしょうか。どうぞ。

○学校教育課 黒瀬指導主事

ありがとうございます。これから考えていくにあたって、すごくいいヒントをいただいたなと思っておりまして、実際にそうやって海外に行った経験のある方たちが、今後教育現場で、逆に生徒等を相手にして活躍していただくことによって、生徒にもすごく恩恵がありますし、その方にとってもまた、ブラッシュアップといいますか、忘れないで使い続けていくことができるというような、両面いいなというように思いながら聞かせていただきました。ありがとうございます。

○田辺市長

はい、今後の参考にさせていただきます。他に、橋本委員。

○橋本委員

今の杉山委員のお話で思い出したことがあります。

それこそ、もう一つ昔前になってしまうのですが、英語活動が小学校に入ってくるという時期に、どうやって子どもに、英語に親しむ環境を作ろうかしらと、とても悩んでいた時期がありました。

その時に、小学校2年生に外国籍の子がいました。アメリカの子だったのですが、その子がいつもお父さんと手をつないで登校してきて、そのお父さんは、ちょっと朝、時間に余裕があったので、自分の子を時々、教室まで送ってきてくれていたのです。

そんなところ、私の方から、少し余裕があるのなら朝、いろいろなクラスに寄って、英語をダーと喋ってパーっと帰ってくれない、教えるのはとても大変だから、2、3分べらべら喋ってパーって帰ってくればいいからとお願いをしてみたところ対応してくださって、どのクラスも、明日はうちに来てみたいな感じで、本当に数分なのですが、喜んでくれたのです。

そうしたら、中国籍やロシア籍の子もいたのですが、うちのお父さんも連れてきていい、みたいな感じで、結構外国の方たちに対してウェルカムのイメージがあったのです。

そうしたら、その時に学校応援団の方々が、それでは地域の方にも、もしかしたら、そういう方がいらっしゃるかもしれないということで、呼びかけをして下さったのです。

そうしたら、先ほど市長がおっしゃったように、実は昔、英語を勉強したのだけれど、使わないので、この頃さびてしまってね、というような方々がおおり、たまにそうやって子どもたちの前で、英語を使う場があったら嬉しいということで、かなりの方が、ごくごく簡単なことでよければということで、英語を使う機会として、学校を活用して下さったという経験がございます。

ですから、杉山委員がおっしゃったように、学校の中に、そういう、ちょっと昔に使っ

ていた技術を活かせる場があるよということを、各学校だけでなく、市内全体で組織的に募集したり、繋げたりしてくれれば、お互いにこうウィン・ウィンになるのかなということを、今、関連して思い出しました。以上です。

○田辺市長

どうもありがとうございます。確かに、市内には潜在的には、外国語の話せる市民というのは、沢山いらっしゃるのでしょうかねえ。市内に約80か国の国籍の外国人が住んでいるということでありまして、国際交流協会が、彼らの今お世話役になっておりますよね。

そういった人材も活かしていくと、こういうことが必要なのかもしれませんが、そのあたり、プロジェクトチームの皆さん、いかがでしょうか。

一言、コメントをお願いします。

○学校教育課 黒瀬指導主事

もし、そういった方向でやらせていただければ、非常にありがたい、この人材の宝庫といますか、そういったところをぜひ、アンテナを高くして、見いだして、活用させていただければありがたいです。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。

参考のために申し上げますと、街づくりは人づくりという観点で、市民局のほうが、静岡シチズンカレッジ“こ・こ・に”を昨年度来開講していますが、今年度の新規コースに、2020年のオリ・パラを見据えて、静岡市内は英語で観光案内できるガイドを育成しようという講座を開講したのです。そうしたら、17ある講座の中で、ここが一番、応募が多かったのです。

30人、いや20人の定員で、100何名応募があったのです。定員に達しない講座がある中で、だから潜在的にはそういう方って多いのですね。

だから、地域的に公募していったら、そういう人というのは見つかる、それが子供たちに還元できればいいのかなというふうに思いました。橋本委員、どうもありがとうございます。その他はどうですか。

○伊藤委員

ちょっと子どもの立場で考えたのですが、やはり日本とか静岡におりますと、海外に留学しているのとは違って、日頃は日本語の中で生活しているので、英語を学ぶとなると、自分が意識して、英語を一生懸命勉強しようと思わない限り、なかなかすぐ日本語になってしまうと思います。

コミュニケーション向上プロジェクトのお話を伺っていて、小学校1・2年生、3・4年生の英語って、すごく楽しそう。歌も歌ったり、体操したり、たぶん小学校の頃の子どもさんって、英語に対しては、「うわあ、難しい。嫌だ。」ではなく、「なんか、楽しい。わくわくする。」という思いで、学んでいると思います。

ところが、いざ中学になると、だんだん難しくなり、勉強のようになると、「ちょっと

嫌だなあ」となってしまう可能性があると思うのです。

だから、中学生になっても、子どもたちが楽しんで英語が学べるということも大事だと思います。そのためには、教室の授業が難しくてダメだという意味では全然なく、それは先生方が教えなければいけないこともある中で、どうしてもこう、義務的な勉強になってしまっただけではありません。

その時に自分が学んだことが、どこかで使えるとしたら、それはとても楽しいことだと思います。それで、今年度から、イングリッシュ・キャンプやイングリッシュ・カフェのようなこともやっただけだと思っているのですが、たぶん、利用できる子どもさんは、まだまだとても少ないと思います。

大人が、その場を作るというお話が、今、いっぱい出ていますが、その中で子どもたちも、自分のできる範囲の英語を使ってみたら、「わあ、できた。」あるいは、「ちょっと難しかった。」というように、もう少し日常的に経験できるようになると、きっと子どもたちは家に帰って、「ああ、もう少し英語勉強しよう。」とか、「ちょっと聞いてみよう。」という気持ちになってくれると思います。

そういう気持ちを持ってもらうことが、大事だなと考えます。

○田辺市長

伊藤さん、ありがとうございます。これも大切な論点だと思います。子どもたちにとって、英語が楽しいなあと思える感覚と、実際の英語の力をつけるという感覚の両立をするというのが、すごく問題だろうと、伊藤委員のおっしゃるとおりです。英語の楽しさは、提供しなきゃいけない。

でも、歌を歌ったり、ゲームをしているだけで、遊びで終わっていきは力がつかないわけです。それで教科化ということで、やはり成績をつけていく、文法を教えるということでの英語の力をつけるということが必要なのですが、それをやると、それが前面に出ると、これまた英語が楽しくなくなってくるという、その両立をどうするか。また、これは小学校がこれから教科化、やはり小学校の時は楽しい楽しいでいいのだけど、中学に行った途端つまらなくなるというのは、やはり勉強になってしまうからなのでしょう。そこをこう、どうブリッジしてくかということも課題だろうというふうに思いますが、そのあたりをプロジェクトチーム、どんなふうに対応してくのでしょうか。

○伝馬町小学校 石野教諭

今、プロジェクトチームでは、小学校で使えるワークシートの開発に取り組んでいるのですが、ただ楽しいだけではなくて、やった、伝わった、という思いをいかにして子どもたちに持たせることができるかに視点を置きながら、開発に取り組んでおります。

そういったものを小学生の頃から、使っていくことで、中学生になってからも、英語を勉強として捉えるだけではなく、自分の想いを伝えるとか、伝わった面白さを味わえるような授業に繋がっていくのではないかと考えて取り組んでおります。

○田辺市長

なるほど。大切ですね。自分の使った外国語で、相手に伝わったと、コミュニケーションが取れたということが、何よりも楽しさになるだろうし、英語を学ぶモチベーションになるというプログラムを開発していくということでもありますので、期待をしたいというふうに思います。さあ英語についてはいかがでしょうか。

○佐野委員

私は、高校の時に初めて外国の方と話をした時に、「ユー、スピーク、イングリッシュ？」と言われたのですが、なぜ、この人は「ドゥー、ユー、スピーク、イングリッシュ？」と言わないのかなと、思ったのです。

要は、コミュニケーションというのは、実は単語が分かっている、身振り、手振りである程度通じてしまう。しかし、日本の子どもたちは、高校生、大学生もグラマーは凄くできると思うのです。

文法的なことは凄く勉強するのですが、臆せず話すだとか、外国の方と堂々と話をするというところが、やはり難しいのかなと思うのです。

先ほどプロジェクトチームの方が、度胸づけのようなことが必要だというようなことをおっしゃっていたような気がしたので、そういう意味で、やはり先程来、話に出ているように、外国の方と、ちゃんと英語を通じてのコミュニケーションが出来なくても、まず、会話をしてみる、人と人として関わり合うということが、まずは非常に大事なのかなという気がしています。

できれば、先生と生徒ではなくて、中学生同士で、英語圏の方と話をするとか、いろいろな取り組みをするとか、そういったことができる、なお良いのかなと思います。

ただ、英語のヒアリングの力というのは、やはり定期的にやらないと、絶対に失っていくもので、やはり外国から帰って来た時は、すごく分かるのですが、少し経つと全然分からなくなってしまうということがあります。

それを恒常的にやっていくのは、なかなか静岡市では難しいし、非常に予算もかかることなのかなと思いますが、そういったことを通じて、その度胸づくりをしていければ良いのかなという気がいたします。以上でございます。

○田辺市長

なるほど。そう、マインドを、ですよ？

○佐野委員

そうですね。

○田辺市長

確かにそれも日本の英語教育の弱点なのかもしれません。正確に話そうとするあまり、どうでしょう…。

はい。まだ、プロジェクトテーマ始まったばかりだけど、今日は問題提起を委員の皆さんからすることなので、ここではあまり、成果というのは求めませんけど。

○安倍口小学校 村田教諭

貴重なお話ありがとうございます。私も、同じように感じています。

私は、昨年、シェルビービルに派遣いただいた者ですが、その時に向こうの小学校と自分が所属していた小学校の交流をやったのです。

そうすると、やはり子どもたちも外国語を学んでいる時に、相手がいるって、すごく大事だなと感じまして、外国の相手に自分たちのことを紹介したり、外国の子どもたちのことを知るとか、やはり、そういう必然性が生まれるので、そのような機会がすごく大事だなと感じました。

なかなかそういう機会を新しく作るとか、増やしていくということも、難しいとは思いますが、先ほどお話があったように「イングリッシュ・カフェ」ですとか、今、静岡市で取り組んでいるそういう場を少しでも広げていくという御意見かなと思って、聞かせていただきました。

本当にコミュニケーションの相手が大事だなと思うので、そういう場を増やしてくれたら良いのではないかなと感じました。ありがとうございます。

○田辺市長

ありがとうございました。

一番、海外に行って、そのことを痛感していると思いますので、よろしく願いいたします。それでは、松村委員。

○松村委員

何をやるということよりも、子どもたちに英語を話させる環境を作るということはどういうことかということ、まずは先生方が英語で話をしようということ、みんなが参加しなければいけないということです。

一つは、先生方が恥ずかしいと思ってしまったら、終わってしまう。

英語は、言葉でツールとして使うのだから、今、佐野委員がおっしゃったように、喋っていることが相手に伝われば良いという考え方をまず持つことです。

自分は、英語の教員をやりながら、娘2人を外国へ嫁がせている。

○田辺市長

ああ、そうですか。

○松村委員

だから、とても大切なことで、特に年齢の高い先生は、恥ずかしいと言って来ない、参加しない。若い先生はどんどん来る。

例えば、証券会社の専務だった友人がいて、その奥さんは全然、英語が喋れないけれど、自分の会社のアメリカ支店へ行くときに、奥さんを連れていくでしょう。

○田辺市長

はい。

○松村委員

その飛行機の中で、おもしろい話があって、キャビン・アテンダントが来て、昼食に「フ

「イッシュ・オア・チキン？」と聞かれて、奥さんは「イエス・アイ・アム・ア・ビーフ」と答えた。分かりますか。「私は牛肉です。」

そうしたら、「ユー・アー・ファニー・ガール」、「プリーズ、プリーズ」、「いろいろなもの食べろ、食べろ」、「オー・サンキュー・サンキュー・サンキュー」。

それで飛行機の中で、人気者になっちゃった。

○田辺市長

ああ、なるほど。

○松村委員

それも大会社の専務の奥さんですよ。

その後、サンフランシスコに着いた。そうしたら、アメリカ人の支店長が迎えに来るではないですか。

すると、奥さんは「あなた、何言ったらいい、何言ったらいい」、「お前、ハウ・ドウ・ユー・ドウぐらい言えるだろう。ハウ・ドウ・ユー・ドウ、はじめましてぐらい言えよ」、「ハウ・ドウ、ユー・ドウ、ハウ・ドウ・ユー・ドウって言っていいのね、あなたお願いよ。お願いよ。」。それで、その人、何て言ったと思う？

何て言ったかというのと、「ハウ・マッチ」って言っちゃった。

(一同笑う)

○松村委員

これ笑い話だけど、本当の話だよ。もう何十年前の話だけど、それをうちの学校の生徒会誌で紹介したこともある。

でも、それで、その奥さんは、その後、子どもを外国に行かせることになり、自分一人でも外国へ行くこととなった。

今やうちの妻も同じだよ。

初めてカナダ行った時に、「なんか買い物出来たのか、お前どうやって買ったの？」と聞いたら、「これ」って言ったって「これ」。

それができますか、先生方に。だから先生方が、何でもかんでも英語を喋る。ツールだから。自分だって書いたり、文法をやってきたわけで、最初は喋れなかった。英語の先生といっても喋れない。だけど僕は図々しいから。

それからもうひとつ、子どもたちが外国の学校と交流する中で、代表として率先して行ってきたから、今は、平気。

では、僕の英語が正しいかって、めっちゃ、めっちゃ。だけど凄く通じる。だから、それは市長、凄いことやろうとしているわけです。

○田辺市長

はい。

○松村委員

だから、静岡市は“しずおか学”でピシッとやるというなら、先生方に「遠慮せず、喋

って、参加してほしい」。

最後に一つだけ。若い数学の先生、大学院を出ている非常に優秀な先生に、イタリアのルネサンスの頃の数学と、今の数学を対比した数学を生徒に教えさせたことがある。

どこがどう違うかを教える。ただし、「ウィズ・イングリッシュ」「バイ・ユーズフル・イングリッシュ」でやらせたことがある。

○田辺市長

ああ。

○松村委員

それは、ちょっとしたことだけど、校長先生がそういうことをやれるか、というか、自分が喋る、校長先生がどんどん参加して喋るような環境を作ることが出来るかということ。

そこには、ALTだけではなくて、今までにいろいろな話が出てきている少しは英語を喋れる人でも結構だから、いろいろな人を輩出すればいい。

その人たちがいるだけで、自分が参加できる。そういうことをやらなければ、これは泡だね。

○田辺市長

はい。

○松村委員

言うことは言うけれど、みんな、できないことをやってもしかたがない、やるならやる。お願いしますよ。

○田辺市長

はい。いや、本当にさすが、学校現場に精通している知に基づいた、示唆に富んだご発言をいただいたなというふうに、感銘を受けました。やはり、その度胸という話があったのですが、伝える力、伝える思いをいかに日本でも作るか、日本人が一番苦手なところですね。

ALTの彼に聞いてみたいのですが、やはり日本で英語教育をしていると、相当何か、そうしてはいけないのではないかと、学校の先生も含めて、こう思いが少ないのではないかなというような、いろいろな戸惑いを、おそらくALTの立場で、ネイティブの立場で、感じたことがあろうかと思いますが、今の松村委員のご発言を受けて何か考えはございますか。

○学校教育課 クエンティン非常勤嘱託

そのようなことは、ちょっと難しい……。

○田辺市長

そうか、ごめん。日本語がちょっと分かると思っちゃった。

○学校教育課 クエンティン非常勤嘱託

沢山の日本人の先生が、英語はちょっと恥ずかしいと……。

○田辺市長

なるほどね。

○学校教育課 クエンティン非常勤嘱託

もしALTがいるなら、もちろんちょっと恥ずかしい。

でも、やればできるよ。

(一同笑う)

先生ができますが、多分、ちょっと何が一番大切かと……。一番、それで、ちょっと難しい日本人の先生で、その英語だけ、英語の授業で、英語だけを話しているの難しいと思います。でも、やればできる。

○田辺市長

本当まさに伝えようという思いが溢れた日本語だったと思いますけど、少しフォローを、補足を。つまり、教える側、先生のほうのマインドも、ここでしっかりしてしてかなきゃいけないのではないかという思いがあります。

○学校教育課 黒瀬指導主事

今、確認したら、小学校の先生方、とくにALTがいて、その英会話をするということであっても、子どもたちの前でということもあるものですから、ちょっと緊張したりだとか、恥ずかしいという思いになるという先生が、やはり中にはいらっしゃるということです。

○松村委員

教員が、一番、気をつけなければいけないのは、自分が教える側であって、自分が偉いと思っていることを捨てなきゃダメだよ。

○田辺市長

なるほどね。

ありがとうございます。教育長からご発言お願いします。

○池谷教育長

ちょうどプロジェクトのメンバーからの話がありましたが、教員に関して、小学校の教員は1,400人以上いるのですが、中学英語の免許を持つ教員となりますと、70人しかいないという状況で、かなり不安が持たれているという中で、研修を一生懸命進めているところです。

こうした中で、ALTの話にもありましたが、子どもたちに楽しく英語を学んでもらわなければならないという状況の下、先生方も自信を持って英語を話すという面で、やはり今後も研修に力を入れなければならない、あるいは先ほどの地域の人材の活用も、本当に大きな課題だと思います。

ぜひ、今後、進めていきたいというように考えております。

○田辺市長

はい。教育長ありがとうございました。大変、委員の皆さん、それぞれの見識の中で、示唆に富む、今後の議論について、有意義な問題提起をいただいたというふうに私も感じ

ております。プロジェクトチームの皆さんもそうなのだろうというふうに思いましたので、一つ一つの発言、もう一度下ろしてみて、そして議論の一つの要素にさせていただきたいなというお願いをいたします。このままいくと、英語で終わってしまいそうなので、“しずおか学”のほうにコマを進めたいと思いますが、このことについての何かございませんでしょうか。よろしくお願ひいたします。いかがでしょうか。

○松村委員

今度は短く。先ほどのプレゼンテーション、彼がすごく頑張っているなど伝わってきて、応援したいなと思いましたが、歴史を学ぶというと、どうしても、だいたいみんな、徳川家康になってしまうのですよ。だから、その辺の視点をずらしたらどうでしょうかというのが一つ。

それからもう一つは、静岡はとても昔からスキルフル、職人が多いのです。下駄職人、今はほとんど作っていないけど井川のメンパ。そういうところの本当の職人芸。

それから、さらにもうひとつ。お茶、お茶の一番うまい入れ方というのは、茶葉がちょうど、すれすれになるくらいの水を入れておく、水出しです。これが一番うまい。

何がうまいかと言うと、お茶のまろみ、甘み。誰が言っているかと言うと、東京六本木の分とく山の野崎洋光さんが言っている。あの一流の職人が言っている。こういうこともやはり皆さんが知らなきゃいけないし、食べるものから何から、やはり勉強しながらということが大事で、これをやる、あれをやるというようにパターンを決めてしまうと他に目線がいかないの、もっといろいろなことに目を向けることが必要。

これから、給食のテーマの時に話も出るのだろうけれど、「うまい」と「美味しい」とは違う、ということに気づいていますかということです。食べて「うまい！」ということが本当にうまいんですよ。「美味しい」って、みんな言うんですよ。「美味しい」をイコール「柔らかい」って言いますが、美味しいと柔らかいは違うんです。

そういうことがあって、要は、静岡の職人さんの技術に目を向ける、そして、その職人の技を子どもたちに教えるということも“しずおか学”の一つのポイントになることは事実ですよ。

(頭を指さして) 手先を動かすことを教えると、老人になってから、来ないんだよね。ピアニストは来ないって言うもんね。だから、それは、やはりとても大切なことだと思うんです。

○田辺市長

石井さんどうでしょう。

○学校教育課 石井指導主事

ありがとうございます。今回の副読本の作成にあたっては、学校の関係者のみならず、大学の先生方や各課と連携しながら、幅広い知見をいただいて、静岡市で大切にされているものとは何か、ということを見極めながら作成にあたりたいと思います。

ご意見ありがとうございました。

○田辺市長

参考にしてください。松村委員ありがとうございます。伊藤委員お願いします

○伊藤委員

今、“しずおか学”のカリキュラムを作っている段階で、そのこととは少し離れてしまうかもしれないのですが、たまたま6月13日の静岡新聞に記事が載っておりました。

固有名詞も書いてありましたので、申し上げますと東中学に静鉄観光サービスさんが来てくださって、中学生を相手に静岡の良さ、観光としての良さをどうやったら発信できるか、どのようなテーマでやったら良いか、実際の静岡市の良いところを見つけて、それを外に発信しようという授業をされたということが載っておりました。

それで、今日は市長部局の皆さんが来てくださっているので、“しずおか学”は“しずおか学”で良いと思うのですが、自分たちが学んだことを発信するというのも、ぜひ考えていきたいと思っております。

一つは、外から来て下さる方に、静岡の良いところ、ここを見てください、ということ自分たちなりに考えてみるということもプロジェクトとして成り立つと思います。このような形でいろいろな企業さんの力をお借りして、学校現場で上手く組み合わせてできればいいことだな、というように感じました。

それともう一つ、私の娘が以前、市立高校に在学中に、夏休中の短期研修でオマハへ行かせていただきました。せっかくオマハへ行くので、オマハの人に、静岡市のことを知っているか、あるいは日本のことをどのくらい知っているか、富士山のことを知っているかどうか、聞いてごらんと話しました。

娘は、オマハの何人かに聞いたみたいですが、あまり知られていなかった。富士山のこともあまり分らなかったという感じだったのです。私たちが思うほど、海外では静岡のことも、日本のこともあまり知られていないと思います。

現在は、インターネットを活用すれば、海外のいろいろな学校と、それほどお金をかけずに交流が十分にできると思います。

そのような中で、先生方が、長期で海外へ研修に行くような機会があれば、研修先の学校と上手くタイアップして、静岡の子どもたちが、静岡の良いところをアピールする、海外の子どもたちの意見を聞くというような授業が、出来るのではないかと思います。

それは一つの英語の学習にもなると思います。また、例えば、静岡の良さをどう広めるか、そのために、自分たちは何をすればいいか、何をしようかなど、“しずおか学”で学んだことが、そのような形で広がっていくところまでできたら良いなというのが私の夢です。

○田辺市長

なるほど、はい。ありがとうございます。大きく2つ論点がありましたけど、要は発信をする機会を設けたほうが良いのではないかいということだと思いますけど、石井さんどうでしょう。

○学校教育課 石井指導主事

ありがとうございます。おっしゃっていただいたとおり、静岡市の良さを学ぶだけでなく、それをどう自分の生き方に活かすか、またどう地域や世界に発信していくか、そういった機会にもなるように作っていききたいなと思っております。ありがとうございます。

○田辺市長

はい。他にも発言を。

○杉山委員

市長もご存知のとおり、私は梅ヶ島の新田というところで育ちました。

そこでは、毎年、「初午」になると、初午祭というお祭りがあり、神楽を舞います。現在は中学生も一緒になって舞っているのですが、神楽は奉納なのですよ。

その意味を、私、今でも分からないのですよ。実は、そこが大事だと思うのです。なぜ、舞いを奉納するか、それは昔からずっとあるのだと思うのです。

それを私は学んでこなかったもので、今でも分からずに、一つのお祭りというイベントの中で、「ああ、あるね」というところで、とどまってしまっている。

少し前に、オーストリアの方々がいらっしゃった時に、中学生が神楽を浮月楼で舞ったのですが、どういう理由で舞っているということも大切だと思います。

市内各地に、同様のものがあると思いますので、“しずおか学”では、こういったことにも着目していただきたいと思います。

○田辺市長

あの、この前オーストリアと日本の将来のための委員会を開催して、梅ヶ島へ行ってもらったのですが、毎年3月、梅ヶ島新田で伝わっている神楽をお見せしたら、大好評。こここそ、そのオーストリアには無い、日本の文化で大変好評でしたよね。また、地域ではお祭りとして定着している。それと学校教育が連動していなかったというのが委員の学校時代だったということですよ。石井さんどうぞ。

○学校教育課 石井指導主事

ありがとうございます。平成34年度から小中一貫教育を進める中で、9年間を通した学びというところを大事にしていきます。その中では、今まで以上に、1年生から9年生まで、どういった力を育てていくかということも大事な視点にしていきたいと思っています。

また、副読本の中でも、より身近な、子どもたちにとって、自分ごととなるような教材にしていけたらな、と思っています。

○田辺市長

はい、分かりました。そう、まさに身近な教材ですものね。はい。橋本委員。

○橋本委員

今の自分ごとということ、あるいはしっかりと身に付く指導になるかという観点で、先ほどのプレゼンを見て、本当に静岡市ってすごいのだなと改めて思いました。

6分野の一つずつの教材ができて、今でも、立派な社会科副読本としずおか学－BOOKといった多くの財がある中で、あれもこれも少しずつかじったのでは何の身にもならないで

すよね。

水を差すような言い方になるかもしれませんが、今後、大事なことは、小中一貫教育のグループの中で、捨てる、絞る勇気を持つことです。

だから、せっかくな資料が山ほどあると、あれもこれもやりたくなくなってしまうのが、静岡市の学校の常だと思うのですが、自分たちの地域では、子どもたちをどんな思い、リズムで育てていくのかという観点で、勇気を持って捨てる、あるいは見送る、または目をつぶる分野があっても良いということを改めて教育委員会がきっちりと示す必要があると思います。

学校は、あれもこれも、素晴らしいことを子どもたちに教えたくなくなってしまうので、教育委員会がリーダーシップを発揮していく必要が大いにあると思いましたが、以上です。

○田辺市長

なるほど、はい、ありがとうございます。それについてはいかがでしょうか。

○学校教育課 石井指導主事

ありがとうございます。これからグループ校で学ぶ分野は、6分野ということで考えていますが、自分たちの地域では、子どもたちにどのような力を身に付けさせたいのか、どんなことを学ばせることが必要なのかということを検討いただきながら、学んでいくことを絞っていただきたいと思います。

○田辺市長

はい、よろしく申し上げます。他に一つ。

○佐野委員

社会科副読本が素晴らしくて、読んでみると、大人の私たちでも知らないような静岡の良さがたくさん書いてあり、現在、授業でどのように活用されているのか、また今後“しずおか学”を展開する中で、どのように活用をしていくのかという疑問はあります。

もうひとつ、橋本委員のおっしゃられた捨てる勇気ももちろん大事なのですが、これで学んだだけで、おそらく静岡博士になるくらい、すごくしっかりと作られるであろう“しずおか学”の教材をどのように活用していくのが、大事だと思います。

さらに、大事なことは、座学だけでなく、やはり実践です。今、清水の七夕祭りでは、商店街の各店が出している飾りよりも、段々と幼稚園や学校が作った飾りが多くなっているのです。すると、子どもたちは、その飾りにいたずらをしなくなる。

祭りを自分たちのものと捉えることで、「参加」から「参画」になり、こういった取組も“しずおか学”の基本となり、最終的には、自治意識を醸成する大事な場面になると思うので、こういったことをどう考えていくのかもテーマとっております。以上です。

○田辺市長

なるほど、七夕祭りの竹飾り、今年、供物が増えたのですね。我がことと思って頑張って学校現場へやってくれているのですけれどもいかがでしょうか。

○学校教育課 石井指導主事

現在あります社会科副読本は、主に社会科の授業の中で活用されていますが、これから作ろうとしている“しずおか学”副読本については、主に総合的な学習の時間の中で、活用していくことを考えているところです。

それぞれの良さはあると思います。社会科副読本については、学習指導要領に基づいた力を育成するために、地域と関連させた学びを進める中で活用しておりますが、より広く深く学べるのが、“しずおか学”の副読本になるのかなというように考えております。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。その議論を重ねていただきたいと思います。

この“しずおか学”についてのそれぞれの委員の見識・・・、ああそうか教育長、忘れていました。すみません、どうぞ、どうぞ。

○池谷教育長

“しずおか学”の副読本については、教育委員会としては力を入れておりますので、かなり良いものができるのではないかと、社会科副読本以上のものができてくるのではないかと、思います。

このような“しずおか学”の副読本については、冊子として欲しいという人も出てくると思いますので、そういったことにも対応できると良いかと考えております。

また、地域との繋がりの強化についても、しっかりとやっていかなければならないと思います。まさに、本日から“こ・こ・に”の講座として“学校・地域ひとつなぎ講座”が始まったのですが、かなり熱心な人が来て来てくれています。

そういった中で、地域との繋がりを強め、地域と学校の相互の関係の中で、授業を進めていきたいと考えております。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。これ、本当に、もっとあれですね。市長部局も応援しますので、広報紙に載せてこういうものを作りましたと、使ってもいいですし、いろいろな方法でアピールすることできるし、市販もできるかもしれませんね。静岡のこと知りたい人、あるいは転勤で静岡にお住まいになる方等々ね、いかがでしょうか。

○学校教育課 石井指導主事

ありがとうございます。ぜひよろしく願います。

○田辺市長

では、ちょっと教育長が、そんな思いがありますので、予算もかかるでしょうから、ぜひご検討をお願いしたいなというふうに思います。

はい。それでは本当に各委員の皆さん、“しずおか学”についても、それぞれの見識の中での貴重なご発言ありがとうございます。あの石井さん、ぜひプロジェクトチームの皆さんに、今日の、子どもたちのための議論のヒントをたくさんいただいたと、いうことを含めて、よろしくお伝えいただきたいと思います。総括的に一言。

○学校教育課 石井指導主事

静岡を愛する子どもたちを育てるための教材として、しっかりと作成してまいりたいと思います。ありがとうございました。

○田辺市長

さて、それでは次にまいります。二つ目の協議事項、日本一おいしい学校給食の提供についてであります。プロジェクトチームの皆さん、待ちくたびれてしまったかというふう
に心配をしておりますが、最初に事務局から教育局長、指導の説明をお願いします。

○望月教育局長

資料2-2をご覧ください。テーマは、日本一おいしい学校給食の提供です。現状ですが、先ほど企画局長から発言がありましたように、今回は食を通じた健康寿命世界一を目指してという副題を付けさせていただきます。

現在、学校給食には、大きく二つの役割があります。

一つは、食育です。資料に記載がありますように、児童・生徒が生涯を通じて健康、安全で活力ある生活を送るための基礎を培うという役割です。

資料の右側をご覧ください。食に関する指導としては、現在、学年別に指導目標を設定して取り組んでおりますが、その下、参考のとおり、昨年の意識・生活アンケート調査によりますと、普段朝食を毎日食べるという割合が小・中学生の段階で9割を超えているものが、大学生になると6割とだいぶ下がる現状がございます。こうした現状が一つあるということです。

それから資料左側の(2)にありますとおり、もう一つの役割は栄養バランスのとれた安心安全な給食を提供するという役割があります。その下に、三つ掲げてありますが、栄養摂取基準を基にした献立の作成、安全安心な物資の使用、それから生きた教材として活用した食育の推進をしていくという役割がございます。

本市が目指しています、日本一おいしい学校給食の提供につきましては、やはりプロジェクトチームを作って、現在、検討を進めておりますので、プロジェクトチームから報告させていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

○田辺市長

はい。ありがとうございます。それでは私からも若干補足をさせていただきますが、この、日本一おいしい学校給食の提供プロジェクトチーム、静岡らしい献立とは何かという問題意識の中で、理想の給食を追求していこうと、その一つのコンペディションとして平成30年、これ文部科学省が主催をしているのですが、全国学校給食甲子園大会というのがあるのです。その給食甲子園にエントリーをしていこうという問題意識を持って結成されました。こちらもちょうど現場で頑張っている給食センターや小学校の栄養教諭、栄養士の皆さん、また学校給食スタッフ、学校給食課の職員で構成されております。静岡らしさを感じる地場産物の選択や、各々の食材の良さを活かす調理を、目下進めて、甲子園大会に備えているという現状だと報告をもらっておりますが、メンバーの紹介を含めまして、プレゼンテーションをお願いいたします。

○学校給食課 柴田主幹

Good afternoon everybody...

(一同笑う)

言わなければいけないような感じになっていたものですから、すみません。時間が押しているのです、残念ですが、ここからは日本語でいかせて下さい。

本来でしたら、ここでプロジェクトチームのメンバーを紹介したいところなのですが、本日は夏休み前の給食最終日ということで、メンバーは現場で、子どもたちの指導に励んでおりますので、プロジェクトチームを代表して、栄養士の和田に来てもらっています。

○学校給食課 和田栄養士

栄養士の和田と申します。今回プロジェクトチームでは、新規地場産物の活用について、JAさんを始め、農家の方、そして管理業者さんとの調整をさせていただいております。

麻機レンコンなど地域の特産物を新たに学校給食に取り入れられたらと思っています。

○学校給食課 柴田主幹

申し遅れましたが、私、プロジェクトチームの柴田と申します。早速、プレゼンを始めてさせていただきたいと思います。

日本一おいしい学校給食の提供を目指して、食を通して地元を知る、好きになる、このような子どもたちの育成を目指して、取り組みを進めております。

まずは、私たちが目指す日本一おいしい学校給食とはどういったものか。これは静岡ならではの献立を提供していくこと、そして、それに連動した食育を推進していくこと、この二つを関連させながら、提供していく、そんな給食を、日本一おいしい学校給食と考えております。

静岡ならではの献立とは、地産地消や伝統的食文化と関連した献立と定義し、例に挙げてありますとおり、お茶やシラスのように地元で獲れるもの、また、地元で古くから親しまれ食されているものを、うまく献立の中に活用できないかと考えております。

ただ今、市長からご紹介いただきましたが、今年度、この取り組みの推進を図るために、プロジェクトチームを発足いたしました。このプロジェクトチームは、献立研究チームを中心に栄養教諭、学校栄養職員、事務局で構成しているチームで、今年度末に献立を確立することを目指して、取り組みを進めております。

このプロジェクトチームの主な取り組みを2点、ご紹介いたします。

まず1点目は、静岡らしさを子どもたちにより伝えることのできる地場産物を検討しております。子どもたちに何を伝えたいのか、そのためにどのような食材をどう料理するのか、どう組み合わせるのかというような視点から、検討を進めているところです。

次に、取組の2点目は、静岡らしさを、子どもたちにより伝えることのできる料理も併せて検討をしていきます。地場産物を使ってどのような料理を作りたいのか。また、どのような料理を子どもたちに提供するのか。この2点を主眼に置きながら、今後、検討を進めてまいります。

なお、この静岡ならではの献立の推進に向けた計画の見直しですが、平成31年度の全校への提供を目標にしております。

そして、そのためにも来年度、平成30年度には、先ほど市長からもご紹介がありました、全国学校給食甲子園へ挑戦いたします。そして、現在は、地場産物を活用した献立の研究を進めております。

平成30年度の主な取組は3つです。1つ目は先ほどプロジェクトチームが行っていると紹介させていただきました、静岡らしさを表す地場産物の検討です。

2つ目は特産食材を活用した献立研究で、3つ目はお茶を活用した献立研究を行っていきます。

2つ目の特産食材を活用した献立研究については、静岡にはたくさんの素晴らしい特産食材がございます。これまでは価格や量の関係で、給食で使用するののでできなかった、これらの特産食材に目を向け、給食の献立に取り入れていこうという試みをしております。

3つ目のお茶を活用した献立研究については、資料右側の写真のとおり、これまでも各栄養士、栄養教諭が工夫をして、お茶を使ったものを提供してまいりましたが、お茶の色味や風味、使用量についても課題がありました。

そこで、本年度は、昨年度のシラスを使った献立を研究したように、文部科学省からの委託を受け、お茶の献立研究を進めているところです。

そして、最後になりますが、日本一おいしい学校給食の提供の取組を通じて、児童・生徒が静岡を知り愛着を持つこと、できた献立を保護者の皆さんが参考にしたり子どもたちとの会話の話題にしてくれること、生産者や業者の皆さんが児童・生徒の食育に関わっていただくこと、さらには給食食材の確実な供給ルートの確定などを期待しております。

このように、多くの関係者の皆さんが思いをはせながら、繋がっていけるように、今後も取り組みを進めていきたいと考えております。以上でプレゼン終わります。

○田辺市長

柴田さん。大変力強いプレゼンテーションをこちらでもいただきました。そこで、先ほどと同じように教育局長のほうから、この学校給食についての課題の設定を、説明をお願いします。そして、あらかじめ会議時間を10分ほど延長したいと存じます。委員の皆さん、あるいは職員の皆さん、用のある方は中座をして構いませんので、ご了承をお願いいたします。

○望月教育局長

資料2-2にお戻りください。左側の下段をご覧ください。今のプレゼンを踏まえまして、課題として捉えているのは、1つ目が日本一おいしい学校給食の提供に本格的にどのように取り組めばよいのかということ、2つ目は大学生以降にも活きる食育のあり方をどう考え取り組んでいけばよいのかということ、3つ目は学校給食における残菜の現状をどのように捉えればよいのかということ、最後に、4つ目は調理現場における安心・安全な給食を提供していくために不可欠な調理現場における人員の確保を、今後、どう捉えてい

けばよいのかということ。このような4点を課題として捉えております。以上です。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。この課題を踏まえて、委員の皆さんからご発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

○松村委員

学校給食は、同じ献立をいっぺんに作るのですが、子どもたちには好き嫌いがあるので、学校給食の中で、「おいしい」ということを重視するのは、非常に難しい。

しかし、食材をどう使うかということについては、今でもその食材の旬の時期を選んで使っているとは思いますが、食材には、「はしり」があり、「旬」があり、「名残り」があるということも、教育の中で、子どもたちに教えてほしい。

例えば、お茶の新芽が出た時に、その葉を天ぷらで食べるなんてことは、大人の社会の話なので、子どもは知らないですよ。

ところが、お茶の新芽、これは「はしり」ですよ。それを少しの塩で食べるというように、これは高級な食べ方じゃないですか。

また、先ほど言ったお茶の水出しを、皆さん、1回、やってみてください。お茶の葉を水で、隠れるか隠れないか、ヒタヒタにするだけにして、ぜひ2時間置いて飲んでみてください。ものすごく美味しいですよ。ぜひ、子どもたちにも飲ませてほしいと思うんですよ。

夏に、冷たいお茶をどう飲むかということを通じて、食材をどこでどう調理するのかを、子どもたちに考えてほしい。

それで、先ほど、給食が残るという話がありましたが、マヨネーズやケチャップを置いて、子どもが食べられなくて残したものには、かけて食べてもいいよ、ということにしたらどうか。

子どもは、味が濃いものをおいしいと言うんですが、これからの食材を考えるとするならば、栄養士さん、管理栄養士さんには、ぜひ、マヨネーズやケチャップなどの味の濃いものは外しておいしいものを考えほしい。

味の濃いものの摂りすぎは、体に悪いんだから。子どものうちから、健康に悪いものは食べさせないほうが良い。

極端な話、味が濃いものはがおいしいのだけれども、本当に、「はしり」「旬」「名残り」を学校給食で教えられたら、すごいね、市長。

○田辺市長

おっしゃる通りですね。本物のおいしさを子どもたちに味わってほしいという意味でのおいしいであって、子どもがコンビニで買って、味の濃いおいしいとは違うんですね。我々の、ここでおいしいと定義するものがね。本来お茶の出し方を、静岡の美味しいお茶をどう子どものうちから、水出しでもなんでもね、飲ませるかというのは、これ一つ、かなり大きな課題であります。あと、もう一つ、125校ありますのでね、小中学校、ここに全部これを提供するということでのハードの整備も今進めているところでありますけれども。

しかし、それはともかくとして、まずもってね、取っ掛かりとして、こういうチャレンジなプロジェクトをスタートさせたというのが今年度でありますけど、ご理解いただけたらと思いますが、柴田さんのほうから、今の委員の発言を聞いていかがでしょうか。

○学校給食課 柴田主幹

ありがとうございます。味がおいしいものというもの、そのものを味わうということに関しましては、そのとおりだなと思うのは、子どもたちが、ときどき「給食がちょっと薄味だな」と言う時があります。「ちょっと苦いな」とか「ちょっと薄味だな」と。私たち大人にとってはちょうどよい味付けでも、「ちょっと薄いよ」と言うことがあります。

そのような時、先生方は「いや、これはこういう味なんだからね」と、子どもたちに声を掛けて下さいます。

一例としましては、ご飯ですね。皆さんは、白いご飯をよく噛まれると思いますが、子どもたちは、サツとかきこんでしまいます。そんな時、先生が、「よく噛んでごらん。何回も噛んでいると、甘くなりますよね。これがご飯の本来の甘味なんだよ」と、子どもたちに教えてくれる。こういう食育をしてくださっている先生は沢山います。

今の松村委員の発言を聞いて、改めて、食育と絡めてそういった大切さも教えていく必要があると考えますので、非常に貴重なご意見いただいたと思っております。ありがとうございます。

○田辺市長

はい。このおいしい学校給食というのは誤解されやすいよね。本物のおいしさを感じさせる学校給食という意味合いですね。ご理解をいただきたいと思います。他に、伊藤委員。

○伊藤委員

私たちの教育委員の中でも、おいしいという言葉はどう捉えるのか難しいよねという話しはしました。

○田辺市長

だから、そういう再定義をすれば、ご理解いただけましたね。

○伊藤委員

私は、子どもがいわゆる一消費者、お客さんとして、食事を摂るときのおいしさだけにしてはいけないと思うのです。

例えば、レストランの食事と学校給食の食事を比較して、どちらがおいしいという話になってしまうのではなく、せっかく地場産物を使うということになると、気持ちでおいしさを味わうということも大事だと思います。

つまり、地場産物ですから生産者が比較的身近にいます。例えば、給食に使われているレンコンが、元々どこに植えられていて、どんな苦勞をして採られているのかといったこと、また、副読本の「静岡だいすき」にも、お茶やサクラエビが生産者から消費者に届くまでの様々な過程が書かれています。

子どもたちが、こういうことを知ることを通じて、自分たちの食べている給食が、実は

多くの方が苦勞して作って下さっているということが分かり、おいしさを感じるということはあると思います。

せっかくの地産地消ということですので、学校の中でそういう教育をしていただくと良いなあと思うことが一点です。

それから、各家庭に配られる給食の献立表では、家庭でも同じ献立を作ることができるように情報提供をしてくださっていると思います。子どもたちが、給食を食べるだけでなく、給食と同じ献立を作る、料理することでおいしさが増すということもあると思います。

こうすれば、大学生になっても、朝食ぐらい簡単に作れて、しっかりと食べられるよということになると思います。

このように、給食を食べるだけでなく、給食の献立を作るなどと連携することにより、おいしさも増えていくのではないかと感じております。

○田辺市長

はい。これも大きく2点いただきましたけれども、市長部局でも義務教育レベルでの学校給食の食育の良さを、これから高校・大学に行っても繋げようというような取り組みも始めているので、そのあたりの連携をしていきたいなと思いますけれども、今の伊藤委員のご発言に対して、コメントを一言お願いします。

○学校給食課 柴田主幹

先ほど、日本一おいしい給食をどう考えているのかというところで、食育と関連させますというプレゼンをさせていただいたので、すごく心強く、聞かせていただきました。

今、皆さんには、実際に漁に出て、シラスを獲っていただいている方々に、子どもたちにお話しいただいている場面をご覧いただいています。

昨年度、子どもたちがシラスを使った給食を食べる前に、この方々が「実はね、僕たちが朝早く船を出して・・・」という話をしてくれました。その話を聞いた後で、給食を食べたものですから、子どもたちからは、とてもおいしいという言葉が聞けました。

こういったところで、やはり心が加味されてくるので、伊藤委員のお話を聞きながら、給食をただ提供して食べるだけでは、非常にもったいないと思います。ぜひ、食育の推進も合わせて、図っていきたいと思います。

食べるだけでなく作る機会の提供についても、もちろん家庭科の中では、そのような授業は行われているのですが、夏期や冬期休業日を活用して、子どもたちが作る機会がより多く設けられないかということ、栄養士や栄養教諭と考えたいと思います。

ありがとうございました。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。伊藤委員、ありがとうございました。ご発言をお願いいたします。橋本委員。

○橋本委員

子どもたちが漁師の皆さんのお話を聞く姿を、つぶさに見せていただきましたが、子ど

もたちは、目をきらきらさせながら、給食を食べていましたが、給食を食べる前に、今回のように生産者の皆さんの話を聞くことは、なかなか難しいです。

そこで、現在でも、時々、子どもたちが給食を食べている時に、給食センターの栄養士さんの話を、お昼の放送として流しているんですね。

例えば、麻機ではこのようにレンコンを作って採ってくれています、というような啓発DVDを作って、給食の時間に、子どもたちが見ることができるようになれば、地産地消を支えてくださっている人と一緒に、給食をいただくことに繋がるということになるのではないかなと思います。配送のトラックの運転手さんの思いだつてあるかもしれませんね。

現在も、パンフレットやリーフレットといった啓発資料を作っていると思いますが、給食を食べながら、こういったことが学べるように、もう少しお金をかけていただいて、給食にはいろいろな方が関わって下さっているということを様々な機会でも、子どもに発信していけたら良いなというように思っていました。以上です。

○田辺市長

ありがとうございます。発言を先に求めたいと思います。

総括して、後でまた、コメントをもらいます。

○佐野委員

先ほど伊藤委員がおっしゃったことに、すごく共感しました。私も「おいしさ」という言葉は味わうおいしさ、狭義のおいしさと捉えていたのですが、心でおいしさを味わっていく、郷土・地域を味わうおいしさという、おいしさの定義を広げて考えると、非常に理解しやすいなと思いました。

今日、実は、おいしい学校給食の意味は何だろう、おいしいとは何だろうということを、市長にも問いかけたいと思っていたのですが、これまでの会話で、非常に落とし込みができて、よくわかりました。

そこで、先ほど、橋本委員がおっしゃったように、こだわりやうんちくを教えることによってもおいしさを味わうということは、すごく大事なことだと思いました。短いが以上です。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。杉山委員お願いします。

○杉山委員

3点あります。

1点目は、最近、中山間地だけでなく、有害鳥獣がたくさん出るのですが、獲る猟師が減っている。そこで、ある意味、だいぶ余っているのですよ、ジビエの材料が。それをうまく使えないかなと思っているので、提案だけさせていただきます。

2つ目は、静岡おでんは、県外から食べに来るんですね。そこで、味は濃いのですが、学校給食には取り入れているのでしょうか。

最後に、この頃、6月頃から暑くて、学校の教室も9月が終わるまで暑いんですね。このように暑い中で食事をするのは、子どもたちの環境的に非常に良くないのではないかと。

市長も、2年ほど前に、東源台小学校で、教員のワークショップの様子をご覧になられたと思いますが、ああいった環境の中で、先生と子どもたちが授業を行っている。

もう、そろそろそういう時代ではなく、エアコンの設置についても考えるべきだろう、涼しい中での給食を食べると、より一層おいしくなるんだろうなというように思います。

以上3点、よろしく申し上げます。

○田辺市長

これも一つひとつ、大変難しい問題提起をいただきました。

一つ目のジビエのことについては、これは市長部局が検討をしているところなのだけれど、なかなか難しいですね。質のいい猟師の確保は。あれ、玉のあてどころが悪いと血まみれになっちゃうので使い物にならないとか、あるいは、打ち取ってから加工するまでの時間が勝負という。また、125校、とにかく量を確保するというのは、これは大変なこと。こういう課題山積なのですけれども、例えば梅ヶ島とか地産地消の中で、一つモデル校的にやると。去年シラスでやったというのはご承知の通りなのだけれども、一つの考え方としてはあるかなと思います。

ありがとうございました。そうしたら、佐野委員と杉山委員のことを総括して、柴田さんコメントをお願いします。

○学校給食課 柴田主幹

ありがとうございました。「心で味わうおいしさ」というフレーズが、ストンと私の中にも落ちてきました。これまで、「おいしい」の定義について悩んでいたのですが、「心で味わうおいしさ」を一つのフレーズとして、これから考え直していきたいと思います。

また、食育についても、生産者の皆さんの話を直接聞ける子どもたちばかりではないということから、校内放送やDVDなどの啓発手法をさらに検討していきたいと思います。

そして、杉山委員からお話がありました静岡おでんは、子どもたちに大好評なのですが、市外から転校してきた子は、だし粉や青のりをまぶしているおでんを見て、不思議そうな顔をします。だから、逆に言うと、静岡おでんは、まさに静岡特有のものということで、ぜひ、これからも給食として提供する頻度を増やす取り組みをしていきたいと思います。

ありがとうございました。

○田辺市長

はい、ありがとうございました。教育長。

○池谷教育長

学校給食課からも、お話をさせていただいた食育については、現行の食育推進計画が今年度までの計画期間となっており、現在、来年度以降の計画の策定を進めています。

この中で、食習慣や食の知識に加えて、将来、自分たちが大人になった時に、子どもた

ちや家族にどのようなものを食べさせるかという、食材を選択する力を子どもたちに身に付ける取組も、しっかりと位置付けていきたいなと感じました。

もう一点。杉山委員のおっしゃったエアコンについて、文科省の全国調査によりますと4月1日で、普通教室のうちエアコンが設置されている割合が全国平均で49.6パーセントなのに対して、静岡県を見ると7.9パーセントとかなり低い状況です。

静岡県には静岡市も含まれていますが、先生や子どもたちは、なかなか厳しい環境で過ごしています。私なんかも、学校に行くと、そこにいるだけでも汗が噴き出てきますものね。これは一つの大きな課題だなというように思います。

○田辺市長

これは市長部局も関係をするのでありますのでね。いろいろな方法で、どう学校教育環境をよくするかということについては、鋭意取り組みたいと思います。また別の機会にこのエアコンの問題は議論をさせていただきたいなというふうに考えています。

はい、どうもありがとうございました。

それでは駆け足で進みます。最後の協議事項三つ目。子どもの貧困対策についてですが、昨年度の議論を踏まえ、今年度、子どもの生活実態調査に基づくものとなりました。この内容について、若干事務局から説明をさせていただきます。

○望月教育局長

資料2-3をお願いします。子どもの貧困対策です。

現状ですが、昨年総合教育会議の協議結果を踏まえまして、現在、各局と連携して、そこに記載させていただいた4点について取り組んでいるところです。

まず、1番目の学校のプラットフォーム化、それと4番目の放課後の居場所の充実について、昨年度の議論を踏まえて拡充等をした取組で、今、実施中です。

これらに加えまして、今年度は、先ほど市長からもお話がありましたように、右側のページにある子どもの生活実態調査を行っています。これは、子ども未来局が主体となって進めていただいておりますが、主なスケジュールのとおり、今月に調査票の配布・郵送を行います。9月末には速報値が出てくる予定になっております。

第2回の総合教育会議では、この速報値の概要を報告させていただき、ご意見をいただきたいと思っております。今回は、現時点で、貧困対策として取り入れた方が良いというような視点がございましたら、ご意見をいただくとありがたいと思っております。よろしく願います。

○田辺市長

はい、局長、ありがとうございました。それでは早速ご発言をお願いします。杉山委員。

○杉山委員

文部科学省が、要保護児童生徒援助費補助金制度を見直し、入学準備金の前倒し支給が可能になっていると聞いております。

現在では、入学後の7月頃に支給されるということなのですが、入学準備に必要なもの

を揃える際には、入学準備金がないという状況ですので、入学する前に支給していただければありがたい、いわゆる前倒しで支給していただければよいと思います。

○田辺市長

はい。この準要保護の就学援助費の件は使い勝手ですよ。事務局のほうから何かコメントがあればお願いいたします。

○望月教育局長

はい。現状をご説明いたします。現在、市の単独事業で行っています準要保護の就学援助費につきましては、杉山委員からお話がありましたように、小・中学校ともに入学後の4月末までに申請いただき、7月に支給しております。以上です。

○田辺市長

はい。そういう改善をこれから試みていくという理解でよろしいですか。

○松村委員

そういうというのは、7月ではなくて早めに払うということですか。

○田辺市長

そうですね。そうすることによって切れ目がない援助ができるということですね。はい。他に。貧困対策から2年目にまたがる議論・協議事項でありますけれども、よろしいでしょうか。

○松村委員

いいですか。貧困の連鎖という言葉、今、頻繁に聞きます。

貧困が、三代続くと、もう脱出できないというデータが出てきている。

親の財産や資産が全くなくて、それが二代、三代と続いていくと、その家庭には、子どもを普通の社会人として育てようとする教育的環境がなくなってしまう。さらに、子どもに対して、こうやらなければいけないよ、ああやらなければいけないよと、支える人材もその家庭の周りにはいなくなってしまう。

三代の貧困を断ち切るためには、もともと、教育しかない。教育がそういった家庭に行きわたらないから、お金、お金、お金と、経済だけになってしまう。経済だけを重視すると、「経世済民」の世と民、国を治め、民を救うということがなくなり、ろくなことはない。

これはものすごい問題発言だと思うのだけれど、僕は、結局のところ、日本の戦後の教育、特に家庭だけれど、いちばんのネックになってしまったのは、神話に全く触れなくなってしまったことだと思う。

神話って作り話だよ。そのとおり、おっしゃるとおりだけれども、子どもに対して、神話はものすごく有効な役割を担っていた。例えば、因幡の白ウサギの話で、ウサギはなぜ皮を剥かれたのか、なぜ蒲の穂綿に包まれて元に戻ったのか。

カチカチ山だって、みんな作り話、民話だって言うけれど、神話だって同じなんですよ。

だから、今の教育界では、全くの異端者の意見なんです。神話を教えるのではなく、例えば、民話とか童話と同じように、一つの物語として、学校の教科書、図書室に沢山置

くということは、とても大切だと、僕は思うんですよ。

こういったことがないから、子どもの教育ができない、貧困ができてしまうと思う。

それから、先ほどの食のお話に戻ってしまうようで恐縮なのだけれど、食べる前に、なぜ「いただきます」と言うのか。これは道徳ですよ。何をいただくのか、命をいただくんだよと。だから、その境界線として箸が横に置かれているということ、皆さん、先生が知っていますか。

フォークとナイフは縦に置くけれど、これは「協力」を表しているんです。ところが、箸は2本。これは、1本に対して、1本がこうやるんだから、「補助」なんだ。

だから、フォークとナイフも助け合いで、これが、とても大切。

箸の役割は夫に対する妻、妻に対する夫と同じだよ、「いただきます」というのはこういう意味だよ、というようなことを、給食の時に、1年に1回でも先生が言ってくれればと思う。

他にも、「ご馳走さまでした」というのは、走るっていうこと、馳も走も。料理を作るために労力を流してくれた人、料理してくれた人、いっぱい運んでくれる人、いろいろ人がいて「ご馳走さまでした」になる、すべて感謝に繋がっている。そういったことを、給食を食べる前に、先生が少しでも話してくれたら良い。年に一回でいい。

○田辺市長

ありがとうございました。たいへん大きな視野からのね、貧困対策についてのご見識をいただきました。これについては、貧困の連鎖の問題、松村委員ご指摘の、それから7人に1人の子どもが貧困だという、今の中流総社会の、中流社会の日本が崩れているという問題、深刻に我々認識しているからこそ、2年目にこの貧困対策、延長して、今年度も審議テーマ、協議テーマにしました。市長部局もたいへんこれについては責任を持っていると思いますので、最後に時間が迫っていて恐縮ですので、教育局長と、それから保健福祉長寿長と子ども未来局長も今日、ここにおりますので、これについて昨年を踏まえて、今年どんなふうに進めていくか、コメントをお願いします。教育局長から。

○望月教育局長

3局、私ども教育局と子ども未来局、それから保健福祉長寿局の連携が一番大切なので、引き続き重点的に取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

○田辺市長

子ども未来局長。

○石野子ども未来局長

はい。貧困の連鎖を断ち切るということで、静岡市の実態がどうであるか、今調査を始めているところです。調査対象はここにある記載の通りなのですが、現在調査票が全ての対象の所にいっております。8月4日を期限として回収をいたします。

それを基に集計をしていきますので、9月末に粗々の部分で、最低限の部分だけでもとりまとめて、それをこの場でご報告していきたいと思っております。それを基に計画の見直しで

すとか、諸々の施策を打ち出すとか、そういったものに繋げていきたいと考えております。以上でございます。

○田辺市長

はい、ありがとうございます。3局ということですので、保健福祉長寿局長。

○平松保健福祉長寿局長

2局長が言ったとおりですので、3局が連携してやってまいります。

○田辺市長

これは今日ちょっと時間がなくなってしまいましたが、その辺と今日の問題提起を次回に持ち越していきたいなというふうに思っております。どうもありがとうございました。

本当に今年度の1回目、新しい教育委員さんの大変なパワーをいただきまして、活発な議論がなされたと心強く思っております。本日予定をしていた議事は以上であります。次回以降は本日の報告や議論を踏まえ、より具体的な議論ができるものと考えております。

この総合教育会議はインターバルの期間が大事であります。

今日の我々がこういう問題で議論をした。その次までにこれだけメインの皆さんにヒアリングにうかがうことがあるかもしれません。また、それぞれ今日の問題提起を掘り下げる時間ももらう中で、次にはこれをどういうふうに施策としていくか、この予算に裏付けを求めていくというような作業が進んでいるかと思っております。

市議会議員の皆さんも今日はオブザーブしております。今日なされた議論の中をぜひ、9月、11月の本会議のテーマ、論点にもしていただければ、大変うれしいなというふうに思います。オール静岡市役所でこの教育課題について、一步でも二歩でも前進をさせていきたいというふうに思いますので、ご協力をよろしくおねがいをいたします。

それでは進行を司会にお返しします。

○司会（企画課 下山主査）

ありがとうございました。次回の会議は10月の予定です。以上で第1回静岡市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

（午後2時50分閉会）